WS年次総会　Bermuda　報告

齋藤愛子（Coach’s Comission Vice Chair）

今回からCoach’s Commission（以下、CC）が初日の朝から2日目に変更、時間も半日から1日に増え、委員長のミケーレ（ITA）、メンバーのジョージ（AUT）、アナスタジア（RUS）、WSからマイケル、マット、アリスター、ボードのトーベン（BRA）が集まり充実した会議ができた。ビクター（AUS）は欠席であった。ボードメンバーへの報告をするため、以下の内容を、時間をかけて話し合っている。また、オブザーバーで参加した会議からの要点➡なども付け加え、項目別にまとめて報告していく。

1. ガバナンス

現在のシステムでは決定事項が進まず、新システムを紹介している。ボード、委員会、カウンシルの役割が変わり、2024年に向けて役割分担を明確にし、スムーズに物事を決定、進めていかれるように改善するプランである。75％の賛同がなければ移行できないので、簡単ではない。

➡AGMにて否決、64％の賛同。反対した理由には、詳細をもっとつめてから賛否を問うべき、ボードメンバーの選び方が不透明、ボードの着任に伴い自国のNFから離脱では人選ができない、カウンシルの役割と必要な委員会との連携でつめが必要、ボードに決定権がありすぎ。などがあがっていた。

➡WS会長は、否決の後すぐに来年5月以前に臨時AGMを行うこと、それまでに今回の案を再度修正して提案することを述べた。今後、進展あり。注視が必要。

➡国際クラス委員会より意見。毎回、提出されたSubmissionのうち、40％がWithdrawnかRejectedとなる。それが再度提出されて逆転されたり、今のしくみには問題があることを9割の人が認めている。早く、新システムにすることが必要。今回のガバナンスはその第1歩である

1. RSXの東京2020の現状

2024年のウインドサーフィンがRSX以外に変更すると、東京でのRSXのサプライはなくなる。自艇になる場合、現在はルールがないので、大会用に厳しくチェックする方法が必要。

RSXが変更になるまでのいきさつを簡単に説明すると：

1. ミッドイヤー前にWSのボードからRSXを2024年も使うと推薦したが否決された。
2. Sea Trialを実施し、iFoilが推薦された。➡Equipment Committteからの資料参照
3. ニールプライド社は2019ユースワールドへの供給をキャンセルした。（選手は自艇参加）
4. ニールプライド社と東京2020の間にはオリピック供給の契約がされていない。
5. ニールプライド社はオーナーが変わり、過去と同様な運営や大会との契約がされていない。

➡Equipment Committee, Events Committee, Council, すべてでiFoil 推薦、可決

　AGMで中国とイスラエルからRSX続投意見書がでたが否決され、iFoilに決定

1. フォイリングでのフォーマットはスラローム、マラソンなど体重の重い選手がアップウィンドで有利にならないよう、現状のRSX適正体重が生かせるダウンウィンド系を想定している。コースも試して来年11月に決定する。

　　RSXの現状は選手への販売が非常に遅れており、地域によっては1年待ちもある。香港、オランダのようにニールプライド社とエイジェントを通さずにやりとりがある国への供給が優先しており、不公平な販売経路に選手からの不満は大きい。また、品質のばらつきもひどく、フィンの破損は続いている。現場コーチからの意見はRSXが2024まで続くかと思うと耐えられない。替えるなら一気にフォイリングへ変更しようという声が大きかった。ニールプライド社は、2024年が決まれば供給は確実に行うと文書を出したが、信頼の回復は1通のレターだけでは、あり得なかった。iFoilのStarboard社はBermudaへ社長自らとトップ選手である営業マンも同行して、各国へのアピールを図り、ウインドサーフィン製造元として世界でトップの会社であること、すでに販売網ができていることを説明し今後の供給プランがRSXを上回るものであることを強調して賛同を得ていた。また、2024年ホストのフランスがフォイリングを押していることも、今回変更の鍵となった。

1. ナクラの東京2020の現状

ナクラはマストのラミネーションを変更しており、折れる構造を改善している。古いマストは軽いが折れる。新マストは１キロ平均重いため、古いマストを探して買うチームが増えている。東京へ向けてインスペクションを決める必要がある。マストの制限をするか、重量を測るか。ナクラはテストなしに販売されたことがこうした改良を施すことになった原因。今後の提案は、４月のSWCジェノアまでは現状維持、オリンピックのNOR、ER、クラスからマストチェックの詳細（東京では厳しい方法）を伝える。ナクラだけでなく、供給クラスはみなグレーゾーンがあり、RSX、49er、FXも見えないルールチートを防ぐ方法を考える必要がある。重たいライフジャケットを使っている選手の取り締まりも必要。

４）東京2020テストイベント

　　WSからの報告は厳しいものだった。TDから50以上の注文を出している。

・主催者、準備不足、マネジメント、リーダーシップがない。

・競技運営に必要なことも、予算がないと費用を理由に実施できない。

・メディカル、サービス部門はだめ。東京は対応できなかった。

・計測ができなかった。台風のためとはいえ、バックアッププランがない。

・FOPはよくやった。WSから派遣のスタッフとの連携もよかった。

・コミニケーション　無線はだめだった。

・トラッキング、成績だめ。ワールドカップでは大丈夫だったから改善できるとは思うが。

・本番でトラッキングができない可能性がある。IOCがやらせない。

・日本のテレビがやるかどうか。SAPのシステムを使う。

・アスリートサービス、暑熱対策

・テストイベントは１回にしたが、２回必要。

・オリンピックを運営するということを考える。

　　今後のアクションとして、チームリーダーやコーチの側から必要な内容は：

・NOCからTokyo2020へメッセージを送るようにする。

・暖かい食事のハーバーでの提供をお願いする

・Logistic Containers　フレイトサポートプラン　早急に発信を要求する

・台風の影響を考えたバックアッププラン　機材段取り必要ならば早急に知りたい

CCからの指摘（皆、現場にいた）

・FXの5艇しかフィニッシュしなかったレースでは、エリアを陸に近い海面にしたのが失敗。

・メディカルのアドバイスで、怪我人を運ぶ距離を優先した設定であったが、波を考えずに距離を優先したため。メディカルが最優先ではなく、艇の性質と海面のコンディションを優先すべき

・気温を優先しすぎて、レースを中止にするとか、あまりとらわれないほうがいい。風待ちの時は暑いが実際にレースをしている時間はOKだった。待ち時間の暑熱対策を考え、海上での待機の判断を考えることが大切。ウインドサーフィンはコーチボートがいない艇の暑熱対策を考えておく必要あり。

・クーリングジャケットがウエイトジャケットにならないように。

・GPS時計　禁止　NORで示す

・PFD　暑熱の問題。　５０NT証明があればいい。

・セーフティー、キルコード。選手の成績には影響させない。コーチだけに処罰。

・ジュリーのアポイント（レベルに達していないジュリーがいる。）

・発電機の騒音と熱風を艇置き場から遠ざけてほしい

・NORをすみやかに出してほしい。（通常は11月会議にはでているはず）

・STRで、コーチボートの数を減らすプランを導入すべき。2年前に提案した資料を基に、再度検討する。江の島のスペース、サステナビリティ―を考え、実施すべき。

　　WS担当ドクター（Neb）を迎えて暑熱対策について報告を受けた。

　　　　・暑熱対策に取り組んだチームとそうでないチームの差がでた。対策は絶対に必要。

・Heat Exahustion　Heat Stroke 　－　A Guide　配布される。

・対策１、海上の運営メディカルボートで氷持参、発生患者をすぐに冷やす。

・風で温度を下げるものもOK

・東京が用意したビブスの素材がだめ。汗をかける服装が大切。

・UVIndexは高い。長袖を着る。汗をかける素材がよい。

・水分補給は1日合計６リットルか。

　　　　・対策２　レース前に体を冷やすことがよい。

　　　　・対策３　RIBの傘は有効、日陰を作ることはよい

　　　　・対策４　陸での日陰が有効、冷房のあるリラックススペース、コンテナ周辺の日陰テント

５）レースマネジメントポリシー

Jan を迎えて、北京五輪の時にできたマネジメントポリシーについて討議した。

・メディカルからの指示で、セイフティー重視になっているが、テストイベントで49erとFXは岸よりでのレースとなり、波が悪すぎて難しかった。また、気温上昇を気にしすぎてレースに影響しているかもしれない。

・風速が５ノットまたはそれ以上ないとレースしないとあるが、レースマネジメントポリシーは北京の時に作られたもの。ルールでは制限はないはず。

・レースの質を気にしてほしい。フィニッシュすることを中心に考えないでほしい。

・セーラーにとってはコンシスタンとなレース運営のコンディションがありがたい。

・パンピングの違反についてもコンスタントな判定基準が必要。

・スタートの映像を東京ではオフィシャルフッテージが使えるか検討中。

６）パリ2024

　　・種目決定（470混合、ナクラ混合、49er男子、FX女子、レーザー男子、ラジアル女子、iFoil男子、女子、Kite混合、オフショア混合）IOCがメダル数を減らすことがあったら、その時にまた討議する。

・Events & Equipmentについて、今はIOCから返答待ち。参加選手数を３２０から３００へ減らされる可能性大。それを基に2020年２月までにWSが東京からの変更を示す。5月に種目別Quotaを決め、11月会議でフォーマットと合わせて決定する。ユニバーサリティーが必要なクラスをどうするか。

・マルセイユはオリンピックハーバーを改築して、2020年末にはOK。2021年から大会を開催できる。

・オフショアのセキュリティーについては、フランスの海軍が担当する。

・オフショアのサプライ艇についてはいくつかの案で進行中。L30のイベントで成功と失敗があり、他社艇も検討中。マルタでのオフショア大会ではL30でやる。エントリーは各国から１艇。予選はフランスで４－５月に行い、全地域が集まる。L30かベネトーかジャヌーでやる。11月中に公示を出す予定。

・オフショアのコースは4パターンを用意し、直前の気象情報を基にコースを決める。

➡（EventsのFormat WGの報告から）レースフォーマットは来年11月に決定、トライアルを行い、各種目ごとに選ぶ。現在のコース系は470混合、レーザー男子、ラジアル女子、ナクラ、49er、FXの６種目。オープニングから上位4艇がファイナルへ進み、オープニングの１から4位を持越し、誰かが2回1位をとった時点でファイナルが終了する。1位が圧倒的に有利になる。カイトはリレーのノックアウト方式、ウインドサーフィン男女はスラロームとマラソン、オフショアは3日から4日のロングディスタンス1本で検討中。

７）ヘイグ２０２２　国枠予選　（オランダ）

・今回種目が決まり、実施は潮を考えて2022年８月6日～21日、または8月1日から14日か検討中。潮回りをみてレースフォーマットとあわせて考える

・２０２１年テストイベントはなく、ユースワールドを行う。それ以外にもクラスごとのイベントを行う。ユースワールドではチームリーダーがオブザーバーとして観覧できる体制にする。

・潮が速い中、複数エリアで、種目が多いと、運営ができるのか。心配。

８）ユースワールド

・ポーランドは良かった。運営もしっかりしていたが、若い運営スタッフの育成を実施し、平均年齢が24歳の運営メンバーはよい試みだった。

・RSXの供給が急遽なくなり、選手負担が大きくなってしまった。ユースオリンピックで供給されているTechnoが今後も続くのであれば、ユースワールドもTechno293Plusにできるとよい。ユースワールドは全艇供給を使うということで普及と将来の五輪選手発掘を目標に開催している。

・ユースワールドの課題は、大会規模の肥大。開催招致の候補がでてこないほど、種目が増え、参加人数が増え、開催地への負担が大きい。今後、どうするか。

➡東京でRSXが最後になることが決まり、2020のサルバドール（ブラジル）ではテクノ293プラスが種目になることが濃厚。メーカーとの供給についての契約が結べれば決定する。サルバドールでは海軍基地に宿泊し、選手はバスでヨットクラブへ移動。治安がよくない場所なので、完璧なガードを予定している。

　（以上、大会主催者からの情報）

９）ユースオリンピック　２０２２

・ダカールはWSが費用をカバーしなければならない。開催は10月から11月で、前半、後半に分けて行う。20艇を男女で2期に分けることが可能。

・ビーチ実施、マリーナがない。IOCはカイトとウインドサーフィンの2種目を推奨。

　➡ユースイベント小委員会ではアフリカの現状を考え、OPが盛んなのに、その後が続かないことをふまえ、シングルハンドディンギーの開催を支持。WSはシングルハンド男女、ウインドサーフィン、カイト混合の５種目でIOCへ交渉する。

・レーザーが選ばれた場合、どのリグかは後で知らせる。現在、4.7とラジアルの間になるようなリグを開発中。うまくいけば、それが使えるのでは？IOCから種目が決定し、シングルハンドディンギーが認められたら、候補をつのり、選定する。RSのAeroも手をあげている。

10）コーチレジストレーション

ワールドカップのレジストレーションはうまく機能した。将来はもっと他の大会にも入れていくべき。

情報共有システムのTwistを軌道に載せてチームリーダー、コーチとの連絡ツールとして使えるようにする。東京2020へ向けて江の島、メディカル等の情報をまず進める。WSはMaddie、CCは齋藤が担当する。レジストレーションはMattが引きつづき担当するので、今後はワールドカップランキングイベントは同様にできるように少しずつ改善していく。

以下、他の委員会会議からの情報補足

１１）2021-2028 Event Strategy　ワールドカップとランキング

　　　Working Group が作成した資料を基に、添付の資料が出た。

　　　・カレンダーについて、開催時期を変更したい場合は、クラス内でイベント時期を交換して対応する。クラスごとにまとまるのがよい。

　　　・アスリートコミッションからの要望は、毎年変わるのではなく、長期的にプログラムができるようにしてほしい。他競技のように競技シーズンがわかるようにしたい。

　　　・懸念事項として、欧州のシーズンに大会が集中するのではないか。南半球、マイアミなどの事情を考えてほしい。アジア大会、パンナムゲームのようなRegional Gameが入る余地がない。

　　　・ランキングも新システムを使う。ポイントは大会の参加規模によってアップダウンする。ジュニアワールドにもポイントを付けるか。五輪クラスの大会ならつけるべきであろう。

　　　・ワールドカップファイナルはカレンダープランとランキングでロジカルにできている。これまでのように独自のイベントでシリーズにするのではなく、既存の大会も含めて、WSランキングの上位選手がファイナルに参加できる権利を得る。ファイナルはオリンピック開催地のマルセイユになるので、選手のモチベーションは参加に動きやすい。ランキングポイントは無理やり遠征をせずとも、ポイントの最高値が決まるので、自分で参加大会を選びやすくなる。ファイナルの参加艇数をオリンピックの枠のダブルにするか、予選なしでシングルフリートにできる規模にするか、今後検討。

　　　・ワールドカップの位置付けは、世界各地でのランキングイベントの上位で、年間チャンピオンを決定すること。世界選手権はクラスの世界チャンピオンを決定すること、となる。

１２）フィン級

　　　　2024年種目から外れたフィン級がいくつかのSubmisionを出してきたが、全て否決。Eventsではこれまでの経緯の説明があり、フィン級が1度男女混合シングルハンドでチャンスをもらった時にちゃんと認められる提案をせずにオフショアと入れ替わったこと、今回の提案では470男女混合、ウインドサーフィンなどを崩して復活を求めることなど、賛同を得られる状況ではなかった。フィン協会は若いセーラーに委員会で嘆願のスピーチをさせていたが、感情に訴えるばかりで、建設的な意見とはいえなかった。

１３）スペシャルイベント

　　　・アメリカスカップやカイトのイベントのプロの扱い。カイトのフリースタイルなどはワールドセーリングのルールに従わなければならないが、難しいところもある。PWAのツアーは始まって長く、賞金レースもある。これら大会に参加する選手はWSに登録していないのが現状。今後、どのように進めるか検討が必要。アメリカスカップもスペシャルイベントで扱われるようになっており、カイトのプロも同様になにか枠組みが必要。

１４）The 2019 World Sailing Awards

　　　ワールドセーリングでは年次総会中に７つの表彰を１夜のレセプションで行う。

　　　・Beppe Croce Award (ワールドセーリングに貢献した個人への賞)は昨年亡くなった国際レーザー協会のJeff Martin氏で、アンジー夫人が代理で受け取った。バミューダは1976年に第1回レーザーワールドを開催した場所で、Jeffはその時に参加（大谷さんも参加していた）しており、それから生涯をレーザー発展のために国際事務局長として働き、ワールドセーリングでも国際クラス委員会、ジュリーなど、ずっとセーリングを支えて活動してきた。会場総立ちで、ジェフの受賞を喜ぶとともに、また、涙した。

　　　・President Development Award（セーリングを盛んにするために活動した努力賞）はオマーンセーリングへ。国際大会を多く運営、オーシャンレースも中東の国々と連携して実施し、Sail GPやグランプリシリーズも開催。世界のセーリング国へと発展を続けている。

　　　・eSailing ワールドチャンピオンの表彰。Velista71(ITA)が優勝した。（大会の詳細は望月さんのお任せします）

・Sustainability Award （サステナビリティ―賞）は取組に対してのもので、RYAのThe Green Blueが受賞した。

　　　・World Sailing Goslings Boat of the Year（ボート賞）はF50 が受賞し、代表してRussell Couttsが受け取った。グランプリで同艇が走っている。

　　　・Hempel Team of the Year はRORCカリビアン600レースで優勝したWizardチームで、他のオーシャでも優勝している。IRCクラスになる。

　　　・Hempel World Sailor of the year 女性部門はデンマークのAnne-marie Rindom選手で、境港のラジアルワールドでの金の他、今シーズンの大会では殆ど全部表彰台に上がった。激戦のラジアル女子の中で圧倒的な強さを見せた1年であり、リオの銅メダルに続き、大好きな江の島で金を狙うとスピーチ。

　　　・同じく男性部門は若干15歳、イタリアのMarco GradoniがOP級ワールド3連覇、大会14連勝の記録と世界中のOPセーラー＋家族友人を味方にして獲得した。15歳の少年にはまだ早いという声がささやかれてもいたが、ローマに近い街に住むMarcoはイタリア連盟の指導を受けて、すでにパスウェイ―から次のプログラムへ進んでいる。「僕はユースワールドを目指して29erに乗り、その後はオリンピックを目指して470で女性クルーと金メダルを獲る。」と将来の挑戦を口にした。オリンピックチャンピオン、アメリカスカップ、オーシャンレースの人達が受賞するばかりだったこの賞に、OPチャンピオンが加わったことは、今回の会議の中で、最高の瞬間だったと思う。これから、470のガブリオコーチの指導で、凄い選手に成長してくれることを期待する。

2020年の年次総会は、10月24日から11月1日、UAEのアブダビで開催となる。

以上